



# 林政 ジャーナル

## No.59

2018年3月15日

2017年3月13日(月)  
日本林政ジャーナリストの会 第39回定期総会基調講演

## カキ養殖業者が植林に乗り出したわけ カキ養殖業 畠山 重篤 氏



「森は海の恋人」に賭けた人生  
国連からフォレスト・ヒーローズの称号

私は三陸の岩手県境の宮城県気仙沼市から来た。本職はカキとかホタテ貝の養殖業をしている。親父の代から私が2代目で今、3代目の息子たちが後を継いでいる。孫が後を継げばカキの養殖業は100年になる。

6年前に東日本大震災に遭った。50年前に私はチリ地震津波を経験している。その時は高校生で、カキの養殖いかだや作業場が被害を受けた。その回復のために親父が大変苦労しているのを見ていた。

今回の東日本大震災は桁が全く違う津波であり、あらゆるもののが全部流されてしまった。ここから抜け出すのは不可能ではないかと思った。今夜10時半からNHKテレビのプロフェッショナルという番組(再放送)を見ていただきたい。NHKの記者が震災後1年間、私どもに密着取材したものだ。

### 海の生物を支える植物プランクトン

その当時の被害状況を見ると、とても復活は無理だと思っていた。しかし今、6年たってみると、海はもうほとんど回復した。海のカキなどの生産量は被災前以上の水揚げが増えるような状況にある。やっと今、見通しがついてきたところだ。

あれだけの大被害を受けた後の海がなぜ早く復活したか。京都大学の魚類学の田中克(まさる)先生が津波の後で自然がどう変遷していくかについての調査チームをつくってお出でいただいた。

海の回復度合いというのは、海の中の生物を支える生き物の植物プランクトンを見る必要がある。ものすごく種類があるが、特に沿岸域のプランクトンは、顕微鏡で見なければ分らないようなもので、キートセロスというプランクトン。これが最も大事なプランクトンで、これ

畠山重篤(はたけやま・しげあつ)氏

#### プロフィール

1943年中国上海生まれ。宮城県立気仙沼水産高校卒。家業のカキ養殖業を継ぐ。NPO法人「森は海の恋人」理事長。京都大学フィールド科学教育研究センター社会連携教授。カキ養殖業のかたわら海の環境保護のため、気仙沼湾に注ぐ大川上流の岩手県一関市の室根山に漁民による植林活動を、特に子供向けの体験学習を実施している。朝日森林文化賞、宮沢賢治イーハトーブ賞、河北文化賞、吉川英治文化賞各受賞。国連からフォレスト・ヒーローズに。著書は「森は海の恋人」(文春文庫)、「日本<汽水>紀行」(文芸文庫)で日本エッセイスト・クラブ賞、「漁師さんの森づくり」(講談社)で産経児童出版文化賞JR賞、「鉄は魔法使い」(小学館)など多数。



を動物プランクトンが食べて、さらにこれを生まれたばかりの魚が食べて、それを大きな魚が食べるという食物連鎖が続く。これがどうなっているかを見なくてはならない。

プランクトンネットといってプランクトンを引っ張る目の細かい網があるが、それは津波ですべて流されてしまった。水産試験場は跡形もない。やきもきしていたが、京都大学の先生方がきてこれを見て、田中先生がこう、おっしゃった。

「畠山さん安心して下さい。カキが食いきれないほどのいいプランクトンがいます」というのだ。

もう、その言葉を聞いて「やれる」という確信を持った。何が一番辛かったかというと、今度高校に行く孫がお父さんの後姿を見て、「カキの養殖を俺もやる」と小学校の時から言っていた。津波で滅茶苦茶になったのを見て「カキ養殖の復活は不可能だ」と孫に言わなければならぬという現実だった。このプランクトンがカキが食いきれないほどいると聞いて、また孫に「お前はこの仕事をやって大丈夫だ」というその安堵感、田中先生からそれを聞いて本当に涙がとめどなく流れた。

### 「森は海の恋人の勝利だよ」

さらに田中先生が、「森は海の恋人の勝利だよ」とおっしゃった。つまり海だけ見ていたのではだめ。そこに流れ込んでいる川の背景の環境を20数年間掛けて整えていたことが結局、このプランクトンにつながった。私が言ったら自慢話になるが、京都大学の先生たちがおっしゃるわけだから、ああ、そういう風に捉え

ていて下さったんだ。漁師が山に木を植えるということを平成元年からスタートさせたが、始めたころはいろいろな方から足を引っ張られて「そんなことやって何になるんだ」と言われた。しかしそれをずっと続けてきたことが、千年に1度の津波を通して、そのことが背景にあったことを証明できたかなというふうに思っている。

それが功を奏したかどうかは分からぬが、実は国連に「世界森林年」という年があって、民間人で森林の保全運動をしている人間をアジア、アフリカ、ヨーロッパ、南米、北米の5大陸から選ぶ仕組みがある。林野庁が漁師の私を多分震災に対する応援ということもあって日本代表に選んでくれた。年が明けてから林野庁から電話があり、「おめでとうございます。畠山さんがアジアの代表になりました」。フォレスト・ヒーローズだとう。かっこいいとか言われた。その授賞式で初めてニューヨークに行き、国連本部で表彰を受けた。最終的に漁師をフォレスト・ヒーローにするに当たり、国連も色々調べたと思う。ものの考え方として、森林ということを考えるときに海まで視野に入れて森林を考える時代が来たなということなんですよ、これは。

海には皆さんが思っているよりすごい意味がある。なぜか。地球温暖化防止、二酸化炭素削減が問題になっている。森林は植物だ。植物の最大の働きに光合成がある。炭酸同化作用だ。光合成は地上の緑ばかり考えているが、地球の7割は海だ。この海の中のプランクトンも光合成をしている。海の中に大森林がある。この森林が陸上の森林と関係しているということ。

漁師が森林のことを考えるときは、陸の森林と海の森林がどうつながっているのかという発想をする。国連が何らかの形でそういう意味合いをキャッチしたなと感じた。メダルをいただいたが、国連がデザインしたフォレスト・ヒーローのメダルは生物多様性を訴えている。森があって、森がどういう生き物と関係しているか。カキの養殖をしている私をフォレスト・ヒーローに選んだのは森林とカキとの関係の取り組みが評価されたのか。

なぜ海で働く漁師の私が山に木を植えることを始めたのか。プランクトンが海にいっぱいいてカキが食い切れないくらいいいればそんなことやらなくてもいい。海ばかり見ていれば済む。

私は気仙沼水産高校を卒業して親の後を継いで養殖業に入った。親の後を継いだばかりの時には何の問題もなかった。1個のカキは1日に200㍑の水を吸っている。水と一緒にプランクトンを、えらを動かし呼吸する度に餌を取っている。魚の養殖は毎日餌をやらなければならないし、魚の場合は売り上げの6割は餌代だ。我々カキ養殖業者は餌、肥料代が一切いらない。カキが呼吸と一緒に食べてくれるから。

カキの種苗はホタテ貝の殻に30個くらい付いている。それがどんどん大きくなっていく。1枚のホタテ貝の殻がバナナの株のようになる。1本のロープに30枚あれば30個のバナナの株がつく。だから餌なしで1本のロープを揚げれば900個採れる。ある意味で良い仕事なのですよ。

プランクトンは海で勝手に増えるものだと思っていた。餌や肥料が要らないか

ら油断していた。

ある時からカキの成長が悪くなったり、死んだりしているいろいろな問題が起きてきた。そのうちに海が赤くなってきた。赤潮。うず鞭毛藻という。これは毒をもっている奴もいて、これが増えてくるとカキの調子が悪くなる。赤いプランクトンを吸い込むものだから、カキのふたを開けてみるとカキの実は普通は白いのだが、これが赤くなる。しかも鮮血のような真っ赤な色に変わる。これを東京・築地の魚市場に出荷したらセリ人がカキのふたを開けてびっくり。血を流したようなカキの樽が真っ赤なわけだから。すぐ電話が来た。売り物にならないから全部廃棄処分にしたという。

思ってもみないことが沿岸域で起こり始めた。当然海が汚れるということは水産高校でも教えられている。こういうプランクトンが発生するという理由は太平洋の沖から原因が来るのではなく、全部内側の人間の側からくることは想像すれば分かる。漁師たちは太平洋の方ばかり見ていた。なかなかこっちを見る姿勢はなかった。水産試験場や水産学者もおられるが、宮城県は東北大学があり、こちらで指導もしておられたが、それまで背景を見てカキの養殖を考える発想を持った研究者はいなかった。

#### 河口の上流に海洋汚染の原因を探索

私は生まれて初めて川の背景を見ようと、気仙沼湾に注いでいる2級河川の大川という河川を、河口から上流まで上がってみることをやってみた。

ご存知の通り、カキの漁場は塩水だけの漁場はない。必ず川の水と海の水が混

じりあう汽水域がカキの漁場になっている。日本最大のカキの産地は広島だが、広島は太田川というデカい川の汽水域だ。世界的に見てもカキの産地はすべて汽水域、川が絡んでいる。塩水だけの海ではカキは採れない。

今まで私たちは真水がプランクトンと関係していることは何となく感じていた。その年、雨や雪が降らないと、カキの洗浄も悪いし、海苔とかワカメの色が出ない。どういう成分がかかわっているかは水産試験場の先生からも教えてもらっていない。とにかく何か真水が、川の水が海産物の成長と関係があることを何となく知っていた。そこから上流まで上がっていました。

宮城県は日本で作っているカキの養殖の種の総元締めみたいなところで、全世界にも行っている。日本中でカキをつくりているところはいっぱいある。私は若い頃からカキの産地を全部見て歩いた。すべて汽水域だ。川の環境を変えるような好機が川の流域である。汽水域が枯れるということをこの目で経験的見ていた。特殊な眼を持っていた。気仙沼は魚がいっぱい取れるところ。昔は水産加工場がいっぱいあって30年以前は加工した水を全部そのまま海に流していた。海が汚れる大きな原因の一つでもあった。電気洗濯機が出現して一般家庭から流れる廃水も上下水道設備も整っていないときだからそれが海に流れて汚れの原因になっていた。それだけみても原因がどこにあるかは何となく分かりますよね。

そこだけ見ていたのではだめなので、川の流域をもう少し上がって行く。水田地帯がある。うちのおふくろが農家の出身で、私は子どもの頃、水田の手伝いも

した。そのころの田んぼは生き物でうようよしていた。久しぶりに田んぼに行つてみたら田んぼが何かシーンとしていた。レイチェル・カーソンが「沈黙の春」で書いたのは、こういうことかとビーンを感じた。農薬や除草剤をどんどん播いてしまうと、田んぼが沈黙の春になってしまう。

農家の方に聞いてみると、「いやあ、それは分かっているけどいまさら手で草を取るわけにはいかない」。それまで私たちは海のことばかり考えて農家の方たちとの対話をしてこなかった。農家の人たちとも話をしなくてはいけないなということが分かった。農村地帯は畜産公害もある。牛とか馬の排せつ物だ。

三陸リアス式海岸は魚介類・海草の宝庫であり、それは塩水だけの海ではなくて必ず川が流れている汽水域であることが言葉の意味からも分かる。2級河川で、河口から8キロのここに管轄の県がダムを造るという計画が分かった。賛成反対の声が聞こえていた。ダムを造ることは俺達には何の関係もないことだろうと、冷ややかに思っていた。当時は人口が増えるという時代で、水が足りなくなる。それでダムを造るという計画だと知った。

気仙沼は宮城県の一番端っこで、川をさかのぼれば県境、岩手県になる。山をみると、拡大造林で戦後植えた杉林が連綿と続いている。昔は少しぐらい雨が降っても川の水が茶色になることは少なかつたが、ある時代から雨が降るとすぐ赤土が海に流れてくることに気付いた。漁師だからそのことにはあまり関心がなかった。実際に山に行ってみると、もう枝と枝が混んできて光が差さず、土がぱさぱさ乾いている。これじゃあ雨が降れば

泥水が流れてくるということがよく分かった。

行政と相談してもほとんど解決策はなかった。海の漁師が岩手県の農地とか山、漁業についても、例えば宮城県の水産試験場や水産事務所があちら側にお願いしてほしいと陳情してもうまくいかない行政の縦割りの壁がある実態を知った。

### 絶望から出発した

#### 漁師による山に木を植える運動

大学も行政も無関心、味方についてくれそうもない。絶望だ。どうするか。「とにかくやれることはやってみようよ」ということでスタートしたのが、「漁師による山に木を植える運動」だった。

最初は周りに研究者も誰もいないので、素人漁師集団で憂き晴らしのような格好で始めた。問題は山から海までをトータル的に見る視点が行政も研究者も一般の人たちも欠けている。そのためには川の頂点を極めなければいけないと考えるようになった。山というのは漁師にとって昔は目印だから、山の形を見て山測りといって3点を見て自分の位置を確かめる。山に漁師の目印になるような森をつくればと考えた。川の流域に住んでいる人たちは研究者も行政マンも含めて「あいつら何をやっているのだろう」と、振り向いてくれるのではないかという希望を秘めて山に木を植える運動をスタートさせた。

事を起こすにはスローガンがいる。「言い出しちゃだからお前考えろ」と仲間から言われ寝ないで考えた。私のおじさんがいつも自慢していたことがあった。気仙沼に注いでいる大川の中流域に熊谷武

雄という明治時代に生まれた歌詠み、歌

人がいて、この人の代表歌が気仙沼市の宝鏡寺というお寺に歌碑がある。何かヒントがあるかなとおじさんに連れて行ってもらった。

わが気仙沼には落合直文という国文学者が生まれている。貴族のものだった和歌を明治、大正、昭和の時代の中でこれを庶民のものに受け渡した人。それを正岡子規と一緒にやった。落合直文の弟子が与謝野鉄幹だ。与謝野鉄幹の先生が気仙沼出身だと分かった。気仙沼は今でも歌が盛んだ。その中から熊谷武雄が出てきた。その歌碑の前に立った。

気仙沼の背景に手長山という山があり、「手長野に木々はあれどもたらちねのははそのかけは拋るにしたしき」と書いてあった。手長山にはいろいろ木があるが、檜の木の林の傍に行くとお母さんの傍に行ったように心が休まる」という意味だ。昔の人は雑木林のことを「柞(ははそ)」といって自然界の母になぞらえていた。100年前に熊谷武雄は歌っている。

### 森と海をつなぐ

#### 子ども向け体験学習のスタート

自分たちが山に植える木は「柞の森」をつくろうと、発想はよかった。理科的ではなく、文的、文学的、文化的なことからスタートしたのがよかった。これが何につながったかというと、平成6年に私たちの活動は山に木を植えると同時に、川の流域の教育の世界にかかわる必要性に気が付いた。川の流域の学校の子どもを海に呼んで体験学習といって森と川と海がどのようにつながっているかを教える寺子屋のようなものをスタートさ

せた。

この問題の解決は川の流域に住んでいる人たちにどうしたら山と川と海がつながっているかを意識付けること。漁師だけではだめで川の流域に住んでいるすべての人たちと価値観を共有しなければならない。それには教育の世界にいくしかない。人の心にも木の苗木を植えなければならない。人の心も緑にしなければいけない。山の学校の子どもたちを海に呼んだら子どもたちの目はらんらんと輝いていた。体験学習をいろいろやった。

農家の子どもだから両親との対話で農薬がどういうものであるかは全部知っている。川の流域というのは必ずそこに人間の生活がかかわっていること。子どもたちは素直に受け取って、体験学習から帰って次の日から「朝シャンで使うシャンプーの量を半分にした」。お父さんには「農薬をほんの少しでいいから減らして」と、すごい現実的だ。小学5年生の娘がお母さんに説教するわけですよ。子どもたちからそんな手紙が来て、自分たちがやっている活動の方向性は間違っていないなど感じ取った。

今まで20数年間、来年で30年になるが、民間で一番子どもたちを迎えている。こういう活動は補助金を付けてだいたい3年くらいで終わる。私たちはスタンスとして行政から人的金銭的援助を一切受けないことを貫いてきた。その姿勢が子どもたちにも伝わる。子どもたちも真剣にかかわってくれる。既に1万人からの子どもたちを受け入れている。その中からプランクトンの学者も輩出した。すると、世の中ちゃんと見ている人がいて、朝日新聞の森林文化賞を受けた。

## 皇后さまとの「柞談義」

これを受けると皇居にお招きがある。びっくりした。津波で死んだうちのおふくろが皇后さまの大ファンで、皇后さまが出版したご本を全部持っていた。歌集が多い。私もすべて目を通して読んだ。なんと皇后さまが「柞(ははそ)」という言葉がお好きだということに気が付いた。「柞談義」ができると思った。

「瀬音」という御歌集があり、皇后さまが最も大切にされている歌集で、そのお歌は正田家の自分のお母さんを歌った歌だ。皇后美智子さまの御歌「子に告げぬ哀しみもあらむを柞(ははそ)葉の母清(すが)やかに老い給ひけり」。「すがやかに」は「清い」と書いて、「きれいに歳を取られましたね」という意味だ。「自分を皇后という立場に嫁がせてしまったためにお母さん、悩みや苦しみもあったでしょう。でも、きれいに年をとられましたね」と詠んだのだ。

気仙沼は歌が盛んなことなどを話した。その時、皇后さまはお声が出なかつた時で、目を見開かれて聞かれ、感動した。歌詠みはいつもいい言葉を探している。「森は海の恋人」という言葉は、そう簡単に出てる言葉ではない。

熊谷武雄の歌碑を見に行って、熊谷の家系を聞いたら孫の代になっている。孫の熊谷龍子さんが、農業をやりながら歌をつくっている。その方に会い、いろいろ教えてもらった。

私は山に住んでいるから海のことはまったく知らない。親戚もいないという。見に来て下さいと言って、海に連れて行って筏のカキの養殖を見せ、カキをご馳走した。

実はカキは海の水だけで育っているわけではなくて柞の森に降った雨が腐葉土を通ってそれが海に流れてきてプランクトンを育ててこういう味が生まれるので教えてあげると、びっくりされる。柞の森とカキが関係していると歌詠みは知らない。手長山からかすかに海は見える。海に連れて行って海から手長山をご覧になった。それで歌人にインスピレーションがわく。しばらくたって一首の歌が送られてきた。中学3年生の国語の教科書にも載った。

「森は海を海は森を恋いながら悠久よりの愛紡ぎゆく」という歌だった。しばらくたって「森は海の恋人」というアコヤガイから真珠がこぼれるような言葉を「いかがですか」という手紙を熊谷さんからもらった。それで私たちは「森は海の恋人」というスローガンを得てスタートした。それを皇后さまにお話しした。私たちの活動が表彰を受けたり、新聞に載ったりすると、御声を掛け下さっている。全国植樹祭とか各地でイベントがあるとき、私が代表で呼ばれて行って皇后さまからお声を掛けてもらうようなことが今も続いている。

政府開発援助(ODA)で日本に招いた外国人の研修会などに私も引っ張り出されて話をする機会が増えてきた。「森は海の恋人」を英語に翻訳すると通訳は「The forest is darling of the sea」となる。英語の教科書にも採り上げたいという話題も出てきた。

なかなかいい訳が出てこない。皇后さまはまど・みちおの童謡のようなものを訳されて出版されている。英語の理解力はすごい。そこで思い切って、ご相談を申し上げてみた。

しばらくして宮内庁からファックスが我が家に入り、「long for」という熟語を使ったらどうですか」とあった。辞書を引いてみると、「あこがれ」という意味がかなり強いということが分かった。グレードの高い言葉で「慕う」という意味だ。「お慕い申し上げている」という意味だ。「海は柞の森を慕うということではないか」。森は海から水蒸気が上がってこなければ育たないし、あらゆる海の生き物は川の上流まで来て実は森の養分にもなる。森と海は相思相愛の関係だ。それが「long for」という言葉に置き換えられている。

何か聞いたことがあるなと思い返した。若い頃私はキリスト教の教会に通い、聖書を見ていた。旧約聖書の詩篇42編に「鹿が谷川の水を慕いあえぐがごとくわが魂も汝を慕いあえぐなり」という有名な箇所がある。口語訳聖書ですが。つまり山が荒れてしまって水が流れなくなつたため、のどが渴いたシカが水を飲みたいと思う。これはlong forという、水を慕う。のどが渴いた死にそうなシカが水を飲みたいと思うほどに神様をお慕い申し上げますというのがlong forだ。その言葉が好きだったから英語の聖書でそれを見ていた。皇后さまに「あの long forですか」と感嘆した。

それで、もう1回ほこりをかぶっていた英語の聖書を開いてみたらこう出ている。きょう、私はこれを暗唱するために私はかなりの時間を費やした。うまくいったら拍手して下さいね。

As a deer longs for a stream of cool water, so I long for you, O God.

上手くいきました。(拍手)。皇后さまの実家は正田家、カトリックの素養がお



ありだ。聖心女子大学出身ですから聖書に精通されておられる。翻訳とはそういうことかということも分かったから国連に表彰されたときに私は求められたスピーチで、このことを会場でお話しした。すごい拍手が来た。long for というのをキリスト教國の人にとっては、「シカが谷川の水を慕いあえぐがごとく…」の箇所は、子どもの頃から頭に叩き込まれている慣用句だ。皇后さまはそれをちゃんとご存じで翻訳されておられる。

7~8年前から大学入試に「森は海の恋人」とはどういう意味か。600字以内で記せという小論文のテーマにもなった。最初は愛媛大学の農学部、次に熊本大学工学部環境工学、その後、私立大学の入試に毎年出ている。私が書いた子ども向けの本からも出ている。

この13年間、京大から頼まれて時々学生に話に行っている。土木をやっている学生も来る。自然を壊そうとしている学生は一人もいない。私の話を聞いて皆分かってくれる。これは日本という国のグランドデザインを考えるとき、川の流域の環境を森林の整備をまずトップにして、これをなるべく自然に近い形に戻していくければ日本の沿岸域って柞の森からの養分で、魚介類、海藻類が餌、肥料要らないで獲れる国なのだ。

### 森と海との科学的なつながり

森と海は科学的にどうつながっているか。植物は何が一番重要かというと、鉄分と植物の関係を知らなければいけない。林学や水産の先生方もこれにほとんど興味を持たなかった。

京大の先生方と話したが、鉄分と植物

についてほとんどの先生方が関心がなかったことにびっくりした。それを教えてくれたのが北海道大学の松永勝彦先生だ。先生に二十数年前に会って、実は鉄分と植物との関係を知らなければ全くこの国の形も環境問題も語れないことを教えてもらった。

葉っぱは緑だ。緑というのはクロロフィル。葉緑素という。あれは何をやっているかというと、光合成をしている。 $CO_2$ をCと $O_2$ に分ける。緑色の色素、葉緑素、クロロフィルができなければ植物は成長することができない。まず鉄分がなければクロロフィルができない。それから、窒素とかリンの肥料を体の中に吸収しようとするときも植物はまず鉄の力を借りないと窒素、リンを吸収できない。

陸上の鉄はそう不足はない。海は貧血だ。窒素やリンはいっぱいあるが、プランクトンがさっぱり増えない広大な海域が地球の海の中にある。その最大の海は南極海だ。ここは鉄が少ないのでプランクトンが増えない海だということが分かった。

森林とどう関係しているということだが、鉄は酸素と触れると酸化して塊になる。森から酸化しない鉄がつくられて海に供給されていることが森林の持つ公益的機能の凄いところだ。

葉っぱが落ちる。腐葉土ができる。腐葉土の中で実はフルボ酸というミネラル物質が生まれる。これが森林の腐葉土の下、酸素のないところで鉄が水に溶けるわけだが、そのままの鉄が川から海に流れてくる。この鉄にフルボ酸という成分がくっついてくれる。酸素がここに全部くっついてしまうと、でかい鉄になる。フルボ酸鉄になると、これが酸化しない

鉄がつくられるということを松永勝彦という先生が世界で初めて発見する。ノーベル賞なのだ。

だから川の水が流れている汽水域は魚介類、海藻はいっぱい獲れるのがよく分かる。それが日本の沿岸だけでなく先ほど司会された毎日新聞の山本悟さんと一緒にってきたロシアのアムール川、その流域は日本の国土の5倍の森林がある。ここでつくられたフルボ酸鉄がアムール川、オホーツク海に流れる。千島列島がある。島があるのは海が浅い。ところが幻の海峡、ブッソル海峡がある。幅40キロで、2,000㍍切り込んでいる海峡だ。ここをフルボ酸鉄がジャンプして北太平洋全域を覆っている。三陸沖が世界三大漁場というのを、暖流と寒流がぶつかっているという説明しかなかった。アムール川の流域の森林のフルボ酸鉄が、世界三大漁場を支えているのだ。ここまで分かってきた。

### 森を重視した国のグランドデザイン

だから、森林の持っている公益的機能を国会議員の先生方も大学の研究者も、ここに着眼してこの国のグランドデザインをどう描くかということではないですか。それがカキ漁師の私に見えてきたことなのです。具体的には、たとえば今、ダム湖にフルボ酸鉄と砂がいっぱい溜まっている。土木技術者は、ダム湖に溜まっているこれをどうやって海まで届けるかの技術開発を早くやるべきだ。そうした公共事業をやればいい。そんな方向でやってほしいと林野庁長官にお願いして、時間が来たので終わります。

(まとめ・上松寛茂)

**共同取材 林政・農政・水産ジャーナリストの会**  
2017年11月21日(火)~22日(水)

## 岩手県住田町・岩手県陸前高田市・宮城県気仙沼市

共同取材 2017.11.21-22

### 森と海 循環する自然

水産ジャーナリストの会

松崎 秀樹

2017年11月21日(火)、22日(水)の2日間の日程で日本林政ジャーナリストの会が主催した岩手県南部と宮城県北部にまたがる森と海の共同取材に参加した。初めてづくしの取材だったが大変に楽しく、かつ、勉強になる取材旅行だった。以下、私が取材に参加した経緯や取材の概要を簡単に報告して、林政ジャーナリストをはじめこの取材に同行した皆様へのお礼に代えさせていただく。

10月初旬に水産ジャーナリストの会の連絡用アドレスに1通のメールが届いた。「農政ジャーナリストの会へ、林政ジャーナリストの会から共同取材の案内が届いた」という内容。当時のメールを引っ張りだしてみると「気仙沼の畠山重篤さんというカキの養殖業者を訪ねるそうです。畠山さんは『森は海の恋人』の方(著者)だそうです。水産ジャーナリストの方も興味があるのでないかと思いますので、情報を共有いたします」とあった。

メールの差出人は村田正さん。農政ジャーナリストの会の会員であり、水産ジャーナリストの会の幹事も務めている。農政ジャーナリストの会向けの案内メールを水産ジャーナリストの会にも転送してくれた。こんな粋な計らいがあって、林政ジャーナリストの会にも農政ジャーナリストの会にも所属していない私がこの共同取材に参加することができた。

私には当初はつきりした目的があつたわけではない。取材先が気仙沼の畠山重篤さんであり、この方が書いた「森は海の恋人」という本を読んでいたこともあり、直感的に「面白そうだ」と感じたことが参加の理由といえば理由だ。初めての経験でもあり多少不安があったが、案ずるよりも生むがやすし、結果は冒頭にも書いたが「楽しく」かつ「大変勉強」になった。

今回の取材は当初、10月23日(月)、24日(火)に予定されていた。この時は迷走台風21号の直撃を受けて一旦中止。取材日程を再調整した結果、約1ヶ月後の11月に再度日程が組まれた。再調整の経緯は承知していないが、上松会長以下関係者のみなさんのご苦労の賜物と承知している。

**岩手県住田町**

**神田謙一町長「地元材を輸出したい」**

こうして11月の共同取材を迎える。集合場所はJRの一関駅。所定の時間に初めて一関駅に降り立った私は集合場所である駅レンターに向かった。大変に寒い日で駅周辺にもまだ残雪があった。

共同取材の参加者は私を含めて全部で7人。上松会長以下林野庁OBの方、林政ジャーナリストの会の会員の方々など全員初対面の方々ばかり。今回の取材には農政ジャーナリストの会の会長である石井勇人さんも参加。団らすも農、林、水産の各ジャーナリストの会が揃うことになった。

レンタカーで1時間ちょっと北上して、昼前に最初の取材先である住田町に到着。まずは腹ごしらえということ

で、住田町が経営するレストラン「まちや世田米駅(せたまいえき)」に入った。ここは築100年以上の民家をリノベーションした町民交流施設。地元の野菜や肉、魚を使った料理は新鮮で美味。私は野菜たっぷりのカレーを満喫した。

昼食をたべて最初の取材先である住田町役場へ。2014年に完成した全面木造づくりの町庁舎に感動した。神田謙一町長は「将来的には地元材を輸出したい」と抱負を語っていたが、木の温もりに包まれた町庁舎は優しさを感じる建物だった。

**陸前高田市「気仙大工左官伝承館」  
武藏裕子館長を取材**

住田町の取材を終えたあと陸前高田市に戻り、「気仙大工左官伝承館」の取材。館長の武藏裕子さんの案内で伝承館の隅々まで案内してもらい、気仙大工の現状や匠の技、作品についてじっくり話を聞いた。欄間に施された気仙大工の技巧、かまどの神様の仰々しいお面など、気仙大工伝承の技をたっぷり味わった。伝承館をあとにして気仙沼の民宿に到着した時はもうすっかり日が暮れていた。

**気仙沼・舞根湾のカキ養殖  
畠山重篤さん「森と海を川がつなぐ」**

2日目は気仙沼湾の北に位置する唐桑半島(からくわはんとう)の付け根、舞根湾(もうねわん)で畠山重篤さんに案内してもらいながらカキ養殖の現場を取材した。「森は海の恋人」の著書で知られる畠山さん。この人の話は経験と様々な人との交流をベースにしており、とにかく面白い。それだけではない。森と海



を川がつなぎ、自然のまま循環させれば自然がいかに豊かになるか、手に取るよう分りやすく教えてくれた。

畠山さんの話を聞いていると、ダムを作り堰で自然を分断し、莫大な費用をかけて防潮堤を作ることが、いかに自然を破壊する行為であるかということが分かってくる。カキの養殖は自然との闘いであると同時に、自然を守ろうとする活動でもあった。舞根湾には現在、カキ養殖

筏が4千台設置されているという。先の東日本大震災ではこれらが全て津波で流れてしまった。

悲惨な当時の状況に思いをめぐらすと胸の痛みを感じる。だからこそ違う。震災から2年足らずで立ち上がったカキ養殖業者の“復活性”に、様々なドラマが隠されていることを実感した。カキ養殖の現場は森に木を植える活動の正しさだけではなく、自然と向きあって生き

ることの大変さも教えてくれているような気がした。

取材を終えたあと畠山さんに採れたてのカキを食べさせてもらった。舞根湾の甘くてしょっぱい海水をたっぷり含んだカキは、プリプリで“絶品”だった。

最後に、飛び込みの参加要請を快く受け入れてくれた上松会長はじめ林政ジャーナリストの会の皆様に改めてお礼を申し上げたい。  
(了)

共同取材 2017.11.21-22

## 気仙大工の里へ

日本林政ジャーナリストの会  
古川 興一

東日本大震災から7年、トゲのようにずっと胸に引っかかっていることがあった。「気仙大工」の存在だ。

もう二昔以上も前になる。岩手県の陸前高田や大船渡など沿岸部を旅行したとき、あちこちに出現する、神社や寺院かと見まがうような豪壮な民家の佇まいが強く印象に残っていた。泊った旅館の主人が「この地方は気仙大工といわれる腕のいい大工がたくさんいた。その気仙大工が建てた優れた建築群は気仙地方の自慢の一つです」との言葉も忘れない。

そんな眠っていた気仙大工への思いが実現した。2017年11月21日、22日の両日に日本林政ジャーナリストの会が宮城県の気仙沼と岩手県の気仙地区への取材行を決めたのだ。直接のきっかけは「森は海の恋人」で知られる

カキ養殖家で、エッセイストでもある畠山重篤さんへの訪問だったが、当方は一瞬にして“気仙大工”的な名が頭をよぎる。気仙大工はもとより彼らが手がけた建築群が震災でどうなり、どう復興、再生されているのか——。また同地域には“森林・林業日本一のまちづくり”を掲げる住田町もある。勇んでの取材行となつた。

欲ばりすぎの過密日程となったが、ありがたかったのは、気仙大工の建築技法を後世に伝えるために建設された陸前高田の「気仙大工左官伝承館」が大震災にもビクともせずに残り、館長の武藏裕子さんが我々を歓待してくれ、囲炉裏を囲みながらの熱っぽく、かつ丁寧な説明があったからだ。同館は明治初期の気仙地方の民家を当時の建築様式そのままに地元の気仙杉を使って建てられた母屋、土蔵、展示棟であり、いわば気仙建築のモデル的な存在として気仙大工入門かっこうの施設でもある。

興味深かったのは、気仙大工は藩政の時代から出稼ぎの大工集団だったということ。気仙地方は山が海に落ちる地形で田畠をつくれず、そのため生計をた

てるには手に職を持つ大工になるのが手っ取り早かった。彼らは気仙地域や仙台はいうにおよばず、関東、北海道などいたるところへ出稼ぎに出た。藩政時代からそれは「南行き」と呼ばれた。彼らは出稼ぎ地で地元の大工と競い、技量を磨いた。それが評判となり、仕事ぶりへの尊称として気仙大工と呼ばれるようになった。気仙の大工が自らを気仙大工と称したのでなく、他から呼ばれたことに意味があり、気仙大工のプライドが生まれたといつていいだろう。

家大工でありながら神社仏閣などの堂宇建築も手がけ、さらには建具や彫刻などもこなした。江戸城桜田門大改修、旧歌舞伎座、大阪城復元などに気仙大工が活躍、関東大震災の復興では1200人、1964年の東京オリンピック時には2000人を超えたという。彼らの手がけた建築は地元はもちろん各所に国や県などの重要文化財として今も残る。

「入母屋造りの千鳥破風」は気仙建築の特徴であり、とくに軒の出を深くするための「船檣造り(せがいづくり)」

住田町役場庁舎外観



神田謙一・住田町長



武藏裕子・気仙大工左官伝承館長



「箕甲返し（みのこうかえし）」も、さらに床の間、欄間、戸袋などに優れた意匠と技量を發揮した。彼らは出稼ぎ地で地元の大工と腕を競うなかで、各地の技術も吸収した。注文主である地域の富豪などの要請をうけるなかで、地域それぞれの文化などをも学んでいく。その集積が気仙大工の技術として継承されるようになり、腕のよい大工集団として“気仙大工”的名声を得るようになったのだ。

### 気仙大工の技術・技能の継承

2011年3月11日の大津波は三陸沿岸を白地図に変えた。奪われた生命と財産は気仙大工も気仙建築も例外ではなかった。気仙地方だけで2千人に近い命が失われ、住宅の被害も5千戸以上、住宅だけでなく気仙建築の神社仏閣も被害を受けた。多くの気仙大工も犠牲になった。3校あった地元訓練校もすべて被災した。気仙大工の復権に悲観的な見方が広がったのも無理はなかった。

だが、救いとなったのが伝承館である。気仙大工の発祥の地とされる陸前高田市の小友町（おともちょう）の高台に建てられた同館は被害にあわず、被災者の避難所になった。武蔵館長は津波被災の惨状を「この世のものとは思えなかった」と語り、避難者の世話を何日も徹夜が続いたという。そして歳月の経過とともに、被災地に心の落ち着きがわずかながらも戻るなか、武蔵さんは東日本大震災のいわば語り部として復興への道を人々に訴え、気仙大工、気仙建築の復権も唱えた。

地元の建築界、行政も立ち上がった。気仙地区の重要な経済、産業資源である林業の再生と、担い手となる大工、工務店の復権は不可欠。気仙建築を手がける工務店や有識者からも再生ののろしが上がった。「森林・林業日本一のまちづくり」を掲げる住田町の第三セクターである住田住宅産業は驚いたことに震災発生のわずか3日後に地元スギ材による応急仮設住宅に着工した。森林・林業復興の一環として「震災前から木造仮設住宅構想を持ち、設計図面も完成が間近かだった」（神田謙一町長）からだ。

木への想いは住田町役場庁舎も木造でつくりあげた。地上2階建て延べ3千平方m近い規模で、平成26年7月に完成。国内初という高い耐震性を誇るラチス耐力壁は建物に美しいデザイン性を加えており、トラス梁が大空間を生み出していく、木造建築の美しさを堪能できる。全国から見学者も絶えない。

「先人たちの技術を含めた財産をどう継承していくか。“気仙大工の会”を支援したりし、林業教育として“林業学”といったものを体験学習とともに確立できないか。ゆくゆくは木造技術を輸出できないか」。震災を乗り越え、神田町長の夢はふくらむ。

### 気仙大工の技術・技能の継承

三陸地方を巡ると住宅復興も目につく。だが、かつて目にした入母屋の家は少ない。工業化住宅などの瀟洒（しようしゃ）な家のほうが多い。気仙地区の美しい入母屋住宅の集落を懐かし

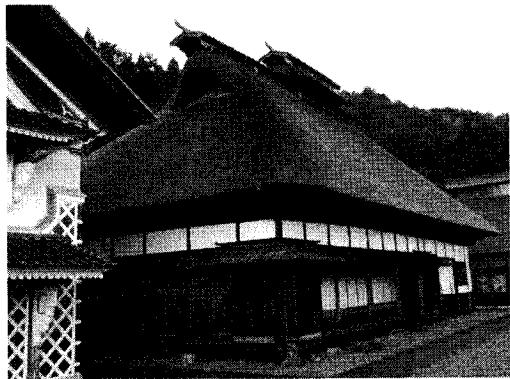
む声も聞こえる。

気仙地区と接する宮城県気仙沼地区の唐桑半島も巡った。唐桑地区はマグロなど遠洋漁業の地であり、漁船の乗組員らは競って入母屋づくりの豪壮な家を建てた。“唐桑御殿”的名で呼ばれるほどだ。明らかに気仙大工、または気仙大工の技術の流れとみていいだろう。その唐桑御殿も「ずいぶん津波で流された」と唐桑の舞根湾でカキ、ホタテの養殖をつづける畠山さんはつぶやき「震災後は伝統的な唐桑御殿を建てる人も少ない」とも嘆く。

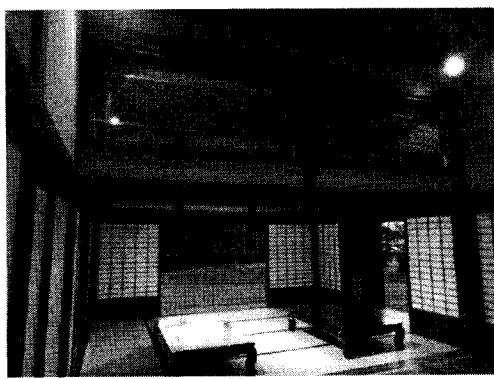
技能者不足もあり、技術的にも、コスト的にも豪壮な気仙建築は厳しくなることは想像に難くない。日本の住宅建築様式も竪穴式から始まって高床式、寝殿造り、武家造り、数寄屋づくりと400年単位で変化してきている。建築もライフスタイルや技術革新で確実に変わっていく。その意味では、気仙建築も変わっていくのだろう。幸いにして被災を免れた伝統的な気仙大工による気仙建築は今後、文化財的ないわば古民家的な扱いを受けていくのではないかとふと思つたりもした。

だが、気仙大工は、各地への出稼ぎで様々な技術を学び、取り入れ、工夫をし、自らの技術とした、進取の気概に満ちた技能集団である。これからもガラパコス化する伝統技術ではなく、近代建築のなかに気仙大工の技術、技能を活かしていくような気がする。地元では「気仙大工の復権と未来を考える会」も最近、発足したという。技術の伝承はもとより気仙大工による新しい気仙建築への挑戦を期待せずにいられない。

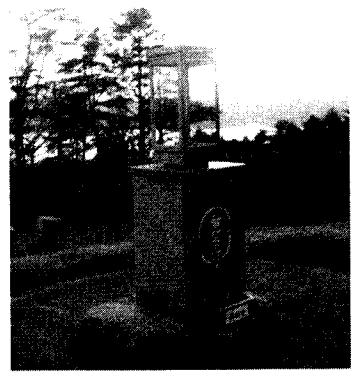
気仙大工左官伝承館



気仙大工左官伝承館（室内）



神戸から分灯した「希望の灯り」



気仙大工の間に「あいつは拝むような仕事をする奴だ」という言葉がある。同僚の水も漏らさぬような仕事ぶりへの誉め言葉だ。いま住宅業界を取り巻く技術革新はAIやIoTの言葉を待つまでもなく、目ざましい。だが一方で、技術の進歩に技能が追いつかず、基本的な技

能の劣化さえ目立つのが現状。気仙大工の「拝むような仕事」の気概を気仙大工のみならず、住宅業界全体が忘れてほしくないと、つくづく思う。

気仙大工左官伝承館の敷地には23年前の1・17を乗り越え、神戸から分灯した「希望の灯り」の鎮魂の碑が、

陸前高田の海と町を静かに見守っている。震災が残してくれた「やさしさ、思いやり、絆、仲間」のメッセージとともに。

駆け足だったが、貴重な考えさせられる取材だった。

(了)

共同取材 2017.11.21-22

## 「森は海の恋人」 畠山重篤さんを訪ねる

日本林政ジャーナリストの会  
上松 寛茂

「漁民は山を見ていた。海から真剣に山を見ていた。海から見える山は、漁民にとって命であった」

これはカキ養殖業者で、エッセイストでもある宮城県気仙沼市に住む畠山重篤さんの著書『森は海の恋人』(文春文庫)の「山測り」の冒頭部分の書き出しである。「木造船」の項の冒頭には「森は漁民の命である。森の恵みが無ければ一日も生きてゆけない。船も漁具も森の産物から造られたからだ。」と記されている。

畠山さんはその著書で「1963年(昭和38年)を境に気仙沼湾の海苔養殖は奈落の底に落ちるように壊滅していく」と記している。沿岸域の海藻類が死滅する「磯焼け」によって海水中の鉄分が不足してカキの餌であるプランクトンが増殖せず、カキ養殖が危機に立たされた。

これはカキ養殖場がある気仙沼湾に注ぐ大川の川の水に関係しているのではないかと疑い、その上流までたどり、森林の伐採により鉄分を供給する豊かな川の水が失われ、相次ぐ埋め立てや海岸のコンクリート化に加え、都市化による廃水などが原因で夏になると赤潮が発生したり、磯焼けが起きたりするという原因を突き止めた。そして、豊かな栄養分を含んだ森からの水の復活を願って、1988年から漁民仲間と一緒に大川上流の室根山(むろねさん・岩手県一関市)に落葉広葉樹を植林する事業に乗り出した。その経緯が「森は海の恋人」に詳細に書かれている。

### 国連からフォレスト・ヒーローの称号

この働きは国際的にも評価され、国連からフォレスト・ヒーローに認定され、畠山さんは「海の幸は山の恵みのおかげ」とニューヨークの国連本部で熱っぽく世界の人々に訴えた。

日本林政ジャーナリストの会は2017年3月13日、東京・内幸町の日本プレスセンター・日本記者クラブでの第39回定期総会で畠山さんに森と

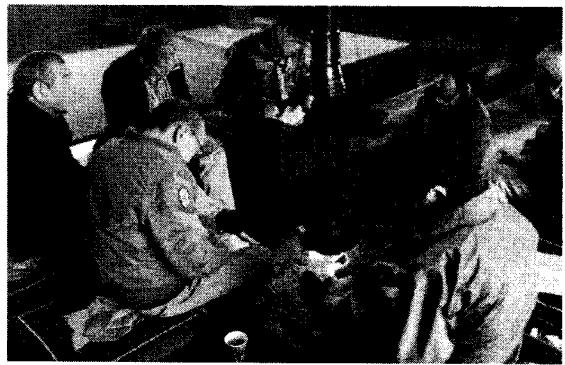
海の関係を伺おうと基調講演をしていただいた。その際、ぜひ畠山さんのカキ養殖場と室根山の植林事業を見せてほしいとお願いし、応諾されて、同11月21日(月)~22日(火)の現地取材となった。

東北は雪化粧していた。

東北新幹線JR一関駅を下車、林政ジャーナリストの会取材団はレンタカーで気仙沼市唐桑町を目指した。日焼けした髭づらの人懐っこい畠山さんは笑顔で迎えてくれた。気仙沼湾の一角、唐桑半島の付け根部分の舞根湾の小さな入り江にある畠山さんの作業小屋わきの船着場から船外機に乗り込み、畠山さんの操縦で内湾から沖合近くにある養殖筏に向けて船出した。

「2011年3月11日の東日本大震災による津波では壊滅的被害を被った。津波で母を亡くした」と、船上で語る畠山さんの言葉に耳をすました。

「あの時はもう、立ち直れないかと、絶望感が襲った」としみじみと語る言葉とは裏腹に、何事もなかったように波静かなリアス式海岸の海は日差しに映えて美しい青の世界が広がって



囲炉裏を囲んで気仙建築について語る武藏裕子  
気仙大工左官伝承館館長と取材メンバー



カキ養殖筏の上で説明する畠山重篤さん

いた。

津波情報が入ると漁船は安全な場所を求めて急いで沖合に向けて避難するが、「あの大震災の時は間に合わず、あそこに見える小さな赤い灯台付近で船がひっくり返り、息子は海に投げ出され、自力で小さな島に泳ぎ着いた」と当時の様子を語ってくれた。

### 震災から6年、血みどろの奮闘に感動

このあたりの水深は60㍍、カキ筏は全体で4,000台ある。筏1台につき20㌧以上の養殖カキがぶら下っている。筏1台は田んぼにすれば1町歩に当たる。だから4,000町歩の水田が広がっている勘定になる。水田は1町歩当たり200万円の肥料代がいるが、カキの肥料代はタダ。海水のプランクトンを餌にしている。この筏が東日本大震災ではすべて、根こそぎ沖合に持っていくされた。震災から6年。畠山さんの話を聞きながら立ち直りのための漁民たちの語るも涙、血みどろの奮闘には感動、頭が下がる思いがした。

船上からふと、遠くを見つめると、どっしりとした山の頂上部分がかすかに見えてきた。室根山だという。森は海の恋人の書き出しの部分には名文でこう記されている。「長い航海を終えた漁船が気仙沼の港を目指して帰路を急いでいる。やがて目を凝らして水平線を必死に見つめていた漁師の視界に、ポツリと黒い陸地の影が飛び込んできた。  
—中略— 船内に思わず歎声が上がるという。それはこの地方の最高峰、室根山の特異な形をした頂上付近の風景な

のである」。この室根山こそが畠山さんたちの「森は海の恋人」としての植林の舞台となった。

取材団の船はカキ養殖筏が海面一面に広がる現場に到着した。木造の筏や鉄パイプの筏など様々。畠山さんは船から養殖筏にひょいひょいと飛び移り、カキのいっぱい張り付いたロープを海中から引き揚げ、見せてくれた。コンブやワカメなどの海藻をはじめ、マボヤなどホヤの仲間が引っ付いている。春になって水温が上がってくると、ムラサキガイ（ムール貝）などが登場。これがくっつくとカキの表面が真っ黒になり、餌を丸ごと横取りされる。カキの養殖はムール貝との闘いでもあるという。

船から上がり、畠山さんから海中でたった今、引き揚げたばかりの新鮮なカキをごちそうになった。スーパー・マークットでは見たこともないような掌いっぱいに広がるほどのジャンボカキを口にはおぼった。海水の塩っからい感触とともに、何とも言えない心地の美味だった。いくつ食べたかな。ごちそうさまでした。

畠山さんたちが植林している室根山には帰途、車で寄った。雪が積もった頂上からは気仙沼湾が一望でき絶景だった。残念ながら植林している場所は見つけられなかった。

### 唐桑御殿と気仙大工

気仙沼は水産業の盛んな遠洋漁業基地であり、合併して気仙沼市となった旧唐桑町の遠洋漁業の漁師は世界の海に出帆、1年の大半を航海で過ごし、帰

港したほんのわずかな期間を家族とのだんらんを楽しむ。その自分への最高の勲章として「唐桑御殿」と呼ばれる、入母屋づくりの豪壮な家を競って建てた。それが始まりといわれ、市内には200軒以上。唐桑半島を車で走ると、あちこちに赤瓦、黒瓦を屋根に乗せ、軒が大きく反った神社建築のような地元産の気仙杉を使った家々が建ち並ぶ。

気仙沼から岩手県陸前高田にかけての地域は気仙地方と呼ばれ、こうした家々を気仙建築と呼び、気仙大工の呼び名は全国に知れ渡った。これを伝える「気仙建築左官伝承館」が、気仙沼市との県境をまたいだ岩手県陸前高田市小友にある。館長の武藏裕子さんは、定休日を返上して我々のために特別に見学を許してくれた。大きな囲炉裏の火を囲んで震災復興ボランティアの語り部でもある武藏館長の話に耳を傾ける。

武藏館長によると、気仙地方は農耕地が少なく、生計を立てるために、江戸時代から次三男の多くは大工や木材関係の仕事に従事し、その中から優れた技能と技巧を備えた大工・左官集団が育っていった。その多くは通年出稼ぎとして全国に散り、見事な仕事ぶりが評価され、気仙建築と気仙大工の名声が広まったのだという。この地方に唐桑御殿が居並ぶ背景にはこうした気仙大工の存在があったからこそなのだと納得した。

楽しみにしていた震災から生き残った「奇跡の一本松」は夜になり素通り。残念だった。

(了)

舞根湾を案内する島山重篤さん



共同取材 2017.11.21-22

## 気仙の山河、海、人

今藤 洋海

一の関から車で一時間ようやく岩手県陸前高田に入る。気仙川に沿って北上し住田町に向かう。河口から8キロ上流の津波避上地点や仮設住宅団地などを見て12時に住田町世田米に到着する。嘗ての豪商の邸宅を利用した食事処ケラッセは、地元野菜やキノコの天ぷらまであるサラダバーは食べ飲みフリー、ランチメニューもボリュームたっぷりで、すっかりこの辺の名所となっている。

20年以上昔に住田町を訪れたときは、遠野の方から山また山を分け入って踏み込んだような鬱蒼とした山奥のような印象を受けた。今回は広々とした整地に3年前に落成した木造の新庁舎が青空に瀟洒に聳え、明るい変貌に驚かされた。ここにまさに地元の気仙材と気仙大工の匠を結集したショールームが出現した。

庁舎内を一渡り見学した後、新しく就任されて間もない神田町長さんと面談した。住田町はかねてから森林・林業日本一のまちづくりをめざして、林業振興計画の策定、川上から川下までの木材流通、木質バイオマスの利用、森林環境学習、FSC森林認証などに他の範となる実績をあげてきた。東日本大震災発生の3日後には地元FSCスギ材を使用した応急仮設住宅の着工に取り掛かった。この仮設住宅は町の予

算で93戸が建設され、太陽光発電、太陽熱温水器、ペレット・薪ストーブ利用のバイオマス暖房と地域の林業資源をフルに活用している。

神田町長は、これまでの方針を引き継ぎつつも、気仙大工の技術を活かした高付加価値化を図り、海外への輸出も視野において取り組みを進めたいと抱負を述べた。

私は思い付きだが、中国などの国では高級家具・建具・内装材などの需要が大きい。ラオス、カンボジヤ、ミャンマー、タイなどでは、唐木即ちシタン、コクタン、ビャクダン、カリン、タガヤサンやチークなど中国、日本などの輸入で採り尽されてしまった。日本でも仏壇など輸入銘木はもう手に入らなくなった。これに替わる木材を気仙大工の技術で仕上げれば有望なのではないでしょうか、と云った。

ちなみに岩手県の木は、スギ19種、アカマツ21種、カラマツ8種、他にキリ、クリ、セン、クルミ、ブナ、ナラ、ケヤキ、シナ、カエデ、カツラ等多々ある。低成本林業で競争力を付けることは容易ではない。別の方向に活路を見出すことも一考に値するのではないかと思う。

前回訪問時に話を聞いた気仙産直住宅・住田住宅産業は活発に活動を続けており、林野庁との人事交流も継続している。

住田町から引き返して陸前高田市小友町の気仙大工左官伝承館を訪れた。

気仙大工左官伝承館の語り部、武蔵

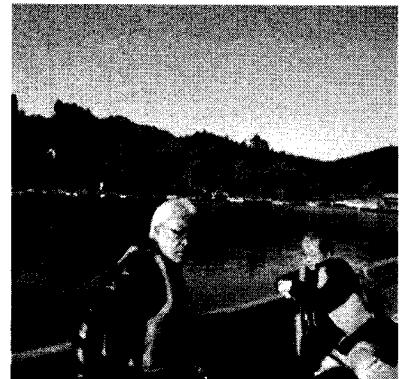
裕子さんのお話では、この辺りは昔から出稼ぎの村で棟梁について技術を真似るタテのつながりの技術集団が気仙大工と云われ、大工・宮大工・船大工、型枠大工、彫刻、建具、左官などの建築のゼネコンである。

左官と言えば、この地方は石灰岩が豊富に有り、これを木炭で焼き、海で採れる海藻を糊として、良質な漆喰が生産されるところです。すべての原材料が自前で調達でき、技術が備われば鬼に金棒です。そう言えば大工道具を作る鉄もあちこちにたたらの残る鉄の故郷でもあります。釜石は近代鉄鋼業発祥の地、さらには平泉・奥州藤原文化の繁栄を齎した黄金の国でもありました。

武蔵さんの話は続きます。母屋三代、蔵五代、①木を選ぶ ②造作 ③完成 ④家の中 ⑤蔵と5世代にわたって家は作るものだという。釘を使わず地震にもびくともしない家です。

伝承館を観て思ったことです。土間、かまど、水場、いおり、客間、仏間などは用の美です。欄間、扇の木組みなどの凝った意匠は無用の美とも謂えるでしょう。両方が融合された日本古来の生活に根差した家を造るのが気仙大工の仕事です。現在の生活で失われた時の復活は難しいとしても求める価値はあると感じました。

県内に400人、全国1千人を数えた気仙大工も、この度の大震災でどうなったか分からないと云う。今年平成29年11月に「気仙大工の復権と未来を考える会」が設立された。これから



活動に注目したい。

この日は宮城県気仙沼市の唐桑半島に宿を取る。ここは遠洋マグロ漁業全盛期に唐桑御殿といわれる気仙大工の館が威を誇っていたが震災で多大の被害を受けた。私はちょうど5年前に高尾の森づくりの会のボランティアで気仙沼大島の震災復旧の手伝いに来た。大島は白砂青松の浜と椿の山が名勝の地であるが、壊滅的な被害を受けた。島の椿公園の被害木を片付ける作業に加わった。今回は気仙沼の取材には参加せず三陸沿岸の震災復興の模様を見て回ることにした。

翌日早朝に宿のご主人に車で陸前高田市の奇跡の一本松に送っていただいた。市の人口は2万4千人、1,756人が犠牲となりうち200余名が今なお行方不明となっている。市街地は津波で完全に消失してしまった。

津波震災から7年近く経過した平成29年11月の岩手県陸前高田市は復興工事が最盛期を迎えていた。巨大な護岸堤防を構築中である。5年前に来たときは、市街地は捜索活動、がれき除去がそれこそ髪の毛一本見逃すことなく進められていた。今はもうおおむね更地の状況になり、新たな嵩上街区造成が始まっている。一方でなお二百余名の行方不明者があり引き続いで捜索活動が求められている。道路に歩く幻影を見て滂沱した体験談も聞いた。前來た時はただ声もなくとぼとぼ歩くしかなかったが、今度は漢詩一首に思いを込めてみた。

陸前高田哀歌 陸前高田哀歌  
湾岸築堤復興基 湾岸の築堤は復興の基

旧街痕跡—松遺	旧街の痕跡は市松遺るのみ
彷徨靈魄帰何処	彷徨する靈魄何処に帰らん
災異恨悲無際涯	災異の恨み悲しみ際涯からん
此恨綿々無尽期	まさに長恨歌です。

陸前高田を出て、大船渡、釜石、大槌、山田、宮古と三陸沿岸を北上した。海岸に沿って護岸堤と道路の工事が途絶えることなく続いている。

途中車窓から見た釜石市鵜住居の悲劇を思い詠む。

渺漠の かなたは見えず  
鵜のすまい (了)

共同取材 2017.11.21-22

## 混然一体のなりわい

農政ジャーナリストの会会長  
石井 勇人

林、漁、農が、それぞれ「業」として分離されたのは、いつ頃からなのだろうか。本来、生活の中に渾然一体となって溶け込んでいた「なりわい」が分解され、最近は「成長産業になれ」と安倍政権に圧力を掛けられている。

この傾向に疑問を感じてきたので、取材の案内を頂いた瞬間に、参加したいと思った。特に畠山重篤さんは「森」と「海」の接点にいる人だ。年次総会でお目に掛かって以来、いつか気仙沼を訪れたいと考えていた。

初日は、木材をふんだんに使った岩手県住田町役場を視察。町長自ら取材に応じてくれた。夕方に陸前高田市の「気仙大工左官伝承館」を訪問。取材チームの皆さんに建築についてとても詳しくて、いろいろ勉強になった。

宮城県側に沈む太陽に、しばし陶酔。

投宿した時には既に真っ暗だったためよく分からなかつたが、翌朝起きてみると「民宿なぎさ」自体が「マグロ御殿」だった。唐桑半島に並び立つ御殿に、なりわいから切り離された遠洋漁業の担い手や、全国に散開した建築技術者たちが、ふるさととの絆をシンボリックに維持しようとした執念のようなものを感じた。

太平洋に突き出た美しい岬を散歩してから、舞根湾にある畠山さんの研究所へ。少し寒かったが風もなく快晴。畠山さんは、船を出して湾内を案内し、森と海のつながりを説得力のある言葉で説明してくれた。みたこともない巨大な牡蠣やホタテを生でご馳走になった。ミュンヘンで入手したフランケンワインを持参したが、甘すぎて合わなかつたかもしれない。

一闇に戻る途中、畠山さんが湾内から「頭がみえる、あれだ」と指差した室根山に寄る。山頂の天文台まで、カーブの多い雪道を篠原さんが運転してくれた。唐桑岬や大島を一望。森と海は、確かに不可分一体につながっていた。

(了)

## 現地研究会

2017年7月12日（水）～13日（木）

群馬県

# 赤谷プロジェクト 林業機械化センター

現地研究会 2017.07.12-13

## 赤谷プロジェクト 国・自治体・住民連携で国有林を守る

上松 寛茂

2017年度春の現地研究会は7月12日（水）～13日（木）、群馬県みなかみ町北部と新潟県境に広がる約1万haの国有林「赤谷の森」を対象に、地域住民と日本自然保護協会、林野庁の3つの中核団体が協働して、生物多様性の復元と持続的な地域づくりに取り組む「赤谷プロジェクト」と同県沼田市の林野庁森林総合研修所林業機械化センターを取材した。

北海道・知床の森に象徴される日本のナショナルトラスト運動などを背景に、国は1998年10月に法律改正して、公益的機能を重視した政策に大転換し、国民総ぐるみによる森づくりに乗り出した。2004年3月に林野庁関東森林管理局と、地域住民で組織する「赤谷プロジェクト地域協議会」に加え、日本自然保護協会が協定を締結、スタートした赤谷プロジェクトはまさにそれを実践する日本で最初の画期的な取り組みだった。当初の7年の協定期間をさらに10年延長したその足跡をたどるのが今回の取材の目的だった。

実は当ジャーナリストの会は13年前の2005年11月にこの2か所を取材、林政ジャーナル43号に赤堀楠雄幹事が訪問記を書いている。小生にとっても再訪となった。

列状間伐した跡地に生育する広葉樹の自然林



シカをおびき寄せる鉱塩誘引装置を指さす魚住悠哉赤谷ふれあい推進センター所長



赤谷プロジェクトの活動拠点となっている「いきもの村」の小屋で同関東森林管理局赤谷ふれあい推進センターの魚住悠哉所長からその概要を聞く。

魚住所長によると、赤谷プロジェクトは、巨木の自然林の復元とイヌワシの営巣環境を保全する赤谷源流エリア、植生管理や環境教育の研究・実践の小出俣エリア、旧街道を活用した地域づくりと渓流環境の復元の旧三国街道エリアなど6つのエリアごとに、地域自然環境の科学的な保全の実現や地域生態系の環境保全を伴った自然活用の実践モデルなどのテーマを決め、取り組んでいるとのこと。1980年ごろには1万haのうち3千haが人工林になり、このうち2千haを自然林に復元する目標をほぼ達成したという。

早速、防虫剤を足元などに綿密にスプレーして入山したが、すぐに左手の親指付近をヒルにかまれ血がにじんだ。夏の暑さで汗だく、草ぼうぼうの道なき道を歩く難行苦行だった。

小出俣スギ伐採試験地では2011年に列状伐採した跡地を、カラマツ斬伐試験地では伐採後の自然力がどのように森林を回復させるのか、伐採幅の違いや光環境の差がどう反映するのか、その実態を見た。いずれも小さな広葉樹の自然林になっていた。

ニホンジカの生息状況と植生への影響のモリタリング調査では、鉱塩による誘引試験現場を観察。確かにシカが鉱塩をなめた跡が分かった。周囲には定点カメラも据えてあった。

地域づくり・ふれあい・森林環境教

育活動では、近隣の小学校の児童たちがイヌワシの観察会やドングリ拾いに来る。2004年10月から毎月第一週末を「赤谷の日」としてサポートーやプロジェクトのスタッフが協力し、森林生態の調査や猛禽類のモリタリング、各種研修プログラムが展開されるなど地域に密着した活動で国有林の発展に寄与している様子を知った。こうした動きは九州森林管理局管内の宮崎県綾町の「綾の照葉樹林プロジェクト」がその後を継いでいる。国、自治体、住民、NPOが互いに連携した森づくりは全国的な広がりが期待される。そういう時代に最早なったのだと痛感した。

\*

林業機械化センターでは、チェーンソーをはじめ、フォアーダー、プロセッサー、ハーベスター、タワーヤードーなど高性能林業機械を全国の自治体関係者や森林組合などに所属する職員を対象に研修させるプログラムを年間通じて実施しているという。指導官とのマンツーマンで研修しているその現場を見た。立木の伐採から玉切り、枝落とし、トラックの荷台への運搬をあっという間に済ませてしまう「すご技」に感動した。労力と費用の大変な省力化だ。

2018年2月9日（金）、東京・代々木のオリンピック記念青少年センターでは林野庁などが主催して林業機械化推進シンポジウムが開かれた。「与作は木を切る」という北島三郎の歌謡曲にある斧や鉄、鋸で木を切る時代は「今や昔」となる日はもう、間近だ。（了）



現地研究会 2017.07.12-13

## 林業機械化センター 林業の生産性と担い手を考えさせられた

古川 輿一

「中大規模木造建築だ、CLT 部材だ、などと木材需要の拡大についていろいろと言うが、木材生産の現場がどうなっているか知っているのか」と、林政ジャーナリストの会の上松会長に脅かされ、林野庁の高木広報官には「高性能林業機械を見てみるのも、林業の原点を知るうえで興味深いですよ」と、唆されて 2017 年 7 月 12 日、群馬県沼田にある林野庁の「林業機械化センター」を訪ねた。名称を聞いたときは建設機械などと同じように林業機械がズラリと並んでいる光景を想像していたが、正式には森林技術研修所の支所ということで、高性能機械を操作する技術指導者の研修機関であり、実習施設なのだ。国有林のなかを延々と四駆で分け入る、まさに森のなかに同センターはあった。その施設は木造の見事な建物群であり、仮設的な小規模の建物との事前の予想を裏切った。事務所棟、寄宿舎棟、研修棟、展示棟から成り、いずれも国産材のスギ、カラマツなどの大断面集成材を軸組材とした木造ならではの重厚感あふれる建物だ。

同センターの青山一郎所長も「構造的にも居住性の面でも優れたモデル的木造建築物」と胸を張る。確かに、事務所棟の銅板やボルトを使わず伝統技

法を応用した「通し貫+(プラス)木栓」という柱・貫接合部や階段の支持柱が合わせ柱と天秤梁による組み物という機械加工と職人技の階段などに目を奪われる。展示棟も時代系列に沿ってチェンソーをはじめ多種多様な林業機械が並び、林業機械史が学べる貴重な施設だが、登り梁と支点桁が互いに相持ちになるようにした小屋組架構、木製段板と手摺部丸鋼のトラスを組み合わせて吊り橋のようなブリッジ階段など建物そのものの建築的興味をそそられる。さらに同展示棟での見ものは入り口に置かれている蒸気機関車だ。いわずと知れたかつて森林鉄道で活躍したツワモノの保存であり、鉄道ファンには見逃せないのである。

ところで、お目当ての高性能林業機械はどこにある？ 建物周辺には見当たらないのだ。そう、同センターは研修、実習施設なのだ。機械は研修用に森の中で稼働中とか。

それではと現場へ向かうが、これが並大抵ではない。急傾斜地をあえぎながら登って実習林の現場に。10 人ほどの研修生が操作方法などの訓練中だ。考えてみると、森林の中を歩いた経験はあるが、林業機械が動いている様子を見たことがない。そこが、都心でも見られる建設機械などとちがうところだが、研修風景は山の中の傾斜地での機械操作だけに教える方、教わる方の緊張感が伝わってくる。記者としては、「高性能」というその高性能ぶりをとくと見学したいわけだが、説明を受けな

がらも機械の威力にすぐに目を見張ることになる。

「ハーベスター」という名の自走式機械は、これまでチェンソーで行なっていた立木の伐倒、枝払い、玉切りの各作業と玉切りした材の集積作業を一貫して行なう。これは見ていて楽しい。枝払い・測尺・玉切りを連続して行うのが「プロセッサ」。簡単に架線集材できる人工支柱を装備した移動可能な集材機「タワーヤーダ」、主索を用いない簡易索張方式で旋回可能な集材機「スイングヤーダ」そして玉切り材をクレーンで荷台に積んで運ぶ集材専用の自走式機械「フォワーダ」など、いずれも時間と手間の効率化を実現する機械であることを実感する。「緩傾斜地、急傾斜地など現場に合わせて機械を組み合わせ、効率的な作業システムを工夫することが大事になる」(青山所長) というのは、やはり作業条件が大きく異なる森林ならではということだろう。

### まだ、近代化を—— 恥ずかしくない？

林業の現場はこれまで人力による危険を伴う重労働。それが機械化によって生産性向上や省力化だけでなく、安全性向上にも貢献することの意義は大きい。木材利用の拡大、新規需要の創出を林野庁はうたい、林業の成長産業化をもスローガンに掲げるが、足元の林業現場が不安定では、それも単なるお題目でしかない。安定した供給量、

低コスト・低価格があつてはじめて成長産業化は実現できるといつていいだろ。それを支える一つが高性能林業機械というわけだ。民有林での保有状況は平成27年度で10年前にくらべ約2.6倍というが、これからは最先端の林業用ロボットなども開発され、導入されていくのは間違いないだろう。

ちなみに、日本と同じ急峻な地形で北海道と同程度の面積ながら日本とほぼ同じ素材生産量を誇るオーストリアと伐出・搬出コストを比較すると、日本は立法メートル当たり9,000円なのに対し、オーストリアは2,400～5,500円という。効率化という点では高性能機械と並び重要な林内路網密度も日本がヘクタール当たり21ヘクタールに対し、オーストリアは同89ヘクタール。較べものにならない。「近代化を急がなくては——」などという恥ずかしい言葉をこの日本から発せざるを得ないのが情けない。

### 予想を裏切る？ 若者に人気の林業

機械化センターでの研修生は年間200人程度だが、その殆どは地方自治体などの林業担当者で、研修後は普及指導に関わる技術者の養成を狙いしている。木材需要の拡大、生産効率の向上、コストダウンの合い言葉のもと、進化する林業機械の習熟は不可欠であり、機械化センターはいわばその総本山として次代の林業を担う人材養成に重きを増しているとみていいのだろう。そして、全産業的な人手不足のなか、

林業においてもその仕事柄から見て深刻な労働力不足に見舞われている——と外野席が見るのは当然だろう。

ところが、ところがなのである。林業労働者はこのところ人数的に下げ止まり、65歳以上の高齢化率も2000年当時の30%をピークに、2010年には21%に減少、一方で35歳未満の若年者率は年を追って上昇し、18%になっている。もとより全産業的にはまだまだ及ばないが、林業の現場が若返り傾向にあるのは間違いない。新規就業の若者が着実に増加しているのも最近の特徴だ。一つには森林資源が充実するなか木材利用の拡大など林業市場の成長が中長期的に見込めるという市場見通しに加え、林野庁が「緑の雇用」の名で林業に関心を持つ若者を対象に林業の基本的技術の習得を支援していることなどが影響しているのだろう。

### 林業大学の設立相次ぐ

#### 林業女子会も

こうした林業へ関心を持つ若者の増加という点で象徴的なのが、林業大学校の設立が相次いでいることだ。平成23年度時点での林業大学は2年制・1年制あわせて6校だったのが、毎年のように開校し、平成29年度には17校にまでふえた。これも、林野庁が平成25年度から林業大学校などに通う若者に最大で年間150万円(最長2年間)を給付するという施策が後押ししている。

さらに最近の話題は、“林業女子会”

の輪が全国に広がっていることだ。この林業女子会は、林業への従事者だけでなく、林業に関心を持つ学生や他産業の女性たちが集まり、間伐イベントや地球環境問題など林業の普及啓蒙活動に幅広く取り組んでいるのが特徴。平成27年時点で、全国16都府県で結成されている。林業女子たちの自らデザインした林業ファッションに身を包む姿が、若い女性たちから「林業はかっこいい」と言われるほどなのだから、若いオトコどもが林業に飛びこむのもうなづけるというものだ。森の中、自然の中での仕事はストレス社会のもと若者にはことさら魅力的に映るのかもしれない。三浦しおんの小説「神去りなうなう」など林業関連の小説や映画なども林業イメージをプラスに動かしていそうだ。

これからは、そのイメージを追い風に、真に林業を成長産業とするための施策を川上から川下までいかにキメ細かく実施していくかが問われるのだろう。機械化センターでの林業機械の高性能ぶりに目を奪われながらも、一方で森林の集約化路網の整備などが急務なことも山の作業を見ながら痛感する。「機械の性能だけが良くても生産性は向上しない」(青山所長)は十分に承知の上で、安全・高効率の林業機械へのいっそうの進化を期待せずにはいられない。

機械を見ながら林業へのロマンをかき立てる若者たちの活躍に想いを馳せることができたのは嬉しかった。

(了)

## 定例研究会

2017年5月29日（月）

# 森林林業の成長産業化の早期実現を 2017年版「森林林業白書」から

「平成28年度森林及び林業の動向・平成29年度森林及び林業施策」（2017年版森林林業白書）が5月26日に閣議決定されたのを受け、同29日（月）林野庁会議室で企画課年次報告班の寺村智課長補佐からその概要を聞いた。

それによると、5年ぶりに改訂した森林・林業基本計画は、さらなる森林資源の活用と山村における就業機会をつくり、所得水準の上昇をもたらす産業へと転換するいわば林業・木材産業の成長産業化を早期に実現することが最大の課題だと力説している。

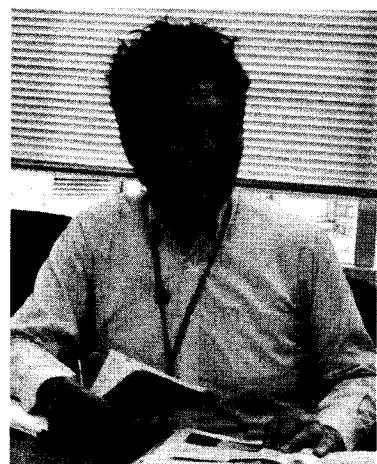
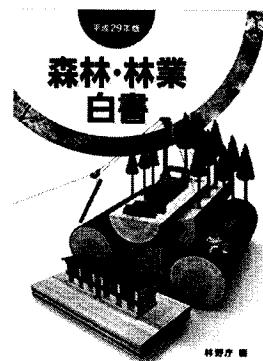
その背景には、戦後に造林された森林の5割は林齢が50年生以上の10齢級に生育し、森林資源として本格的伐採可能な収穫期を迎えており、国内の木材需要量を十分満たす水準にありながらそれを活用できず、木材価格の低迷などに伴う森林放置で宝の持ち腐れとなっている森林の現状からの脱却を白書は強く訴えている。

そのためには原木の安定供給体制の構築や木材産業の競争力強化に加え、新たな木材需要の創出に向けた取り組みを推進し、林業・木材産業の成長を通じて先に安倍内閣が打ち出した地方創生の目玉としても位置付けている。そうした意欲的な姿勢の裏で、日本の森林林業が目に見えた形で上昇気流に乗せられない苟立ちも垣間見えるような気がした。

森林法などの法改正では、森林所有者らに伐採後の造林の状況報告を義務

付ける一方、森林経営計画の認定要件に鳥獣害対策を講じることを追加するなどした森林資源の再造成の確保や森林組合自らが森林を経営する事業の要件緩和で施業を集約化することにより国産材の安定供給体制を推進するほか、森林の公益的機能の維持増進を目指すなどの計5本の法律を改正したことと挙げている。

東南アジアを中心に海外の国々の森林から違法に伐採された木材の流通が社会問題となっている中で、2016年5月に公布され、2017年5月に施行した「合法伐採木材等の流通及び利用の促進に関する法律」（クリーンウッド法）について白書は、画期的な出来事と特記している。違法に生産された不当に安い木材製品により国内の木材産業に打撃を与えており、伐採国の森林の減少・劣化に加え、森林の生態系を破壊し、地球温暖化が進行するなどの弊害が起きており、違法伐採による木材やその製品の排除策として注目されている。具体的には合法性の確認を適正に実施する木材業者をはじめ、建築、家具製造、製紙などの事業者を「登録木材関連事業者」に登録する仕組みをつくり、合法木材の流通を促進しようというものだ。既に登録実施機関として日本森林技術協会や日本合板検査会など5機関が指定されている。これは農水省だけでなく国交省、経産省の共管事項としている点で注目される。だが、合法木材の使用は努力義務にとどまり、罰則もなく、違法木



林野庁企画課年次報告班  
寺村智・課長補佐

材伐採を取り締まる法規制があり、行政が摘発できる欧米と比較して効果を疑問視する向きもある。

このほか、木造による高層建築が可能なCLT（直交集成板）の普及を目指す基準の整備と新たなロードマップの公表、熊本地震や台風災害の取り組みなどが今回の白書のトピックスとして紹介されている。

（記・上松寛茂）

## 報告

### 日本林政ジャーナリストの会 第39回定期総会

○日時 2017年3月13日(月) 15:00~20:00  
 ○場所 日本記者クラブ：東京都千代田区内幸町2-2-1  
 (日本プレスセンタービル内)

#### ○次第

1. 総会 15:00~16:00 小会議室(9F)

- (1) 会長挨拶
- (2) 議長選出
- (3) 議事
  - 第1号議案 2016年度活動報告  
収支決算並びに監査報告
  - 第2号議案 2017年度活動計画及び収支予算
  - 第3号議案 役員改選
  - 第4号議案 その他

2. 基調講演 16:00~17:30 会見場(9F)

<講師> カキ養殖業・畠山重篤氏(「森は海の恋人」著者で  
国連からフォレストヒーロー称号授与)  
 <演題> カキ養殖業者が植林に乗り出したわけ(仮題)

3. 懇親会 18:00~20:00 大会議室(9F)

#### 第1号議案 2016年度活動報告、収支決算並びに監査報告

##### 1. 第38回定期総会

第38回定期総会 2016年3月9日(水)、東京・内幸町の日本プレスセンター内日本記者クラブ小会議室で開催。

上松寛茂会長を議長に選出、2015年度の活動報告、決算報告、2016年度の収支予算案、活動計画案を原案通り決定した。

基調講演は、2020年東京オリンピックの開会式が行われる新国立競技場を設計した建築家で東大教授の隈研吾氏が「木質社会と建築文化の融合～『場所の力』を生かす未来」と題して、「コンクリートの時代から木の時代がやってきた」と、大胆かつセンセーショナルな切り口で、木造建築の素晴らしさを語り、「木を多用した人にやさしい新国立競技場の完成を目指したい」と、熱っぽく語った。会場には200人を超える聴衆者が集まり、テレビ放送各社の報道カメラが立ち並ぶ壯観な光景が展開された。この後、懇親会に移り、林野庁や林業関係者らを含めた歓談のひとときを持った。

##### 2. 研究会

「地方創生と木質社会」を年間テーマに、以下5回実施した。

#### 2月9日(金)

「製材工場の里山資本主義」  
銘建工業社長・中島浩一郎 氏  
5月31日(火)

「COP21・パリ協定で森林・住宅はどうなる」  
当会幹事・水口哲 氏  
6月15日(水)

「平成27年度森林・林業白書」  
林野庁木材産業情報分析官・坂井敏純 氏

8月31日(水)

「江戸城天守の再建を目指す」  
NPO法人江戸城天守を再建する会理事・  
土屋繁 氏

#### 11月29日(火)

「著書『山のきもち』で伝えたかったこと」当会  
会員・毎日新聞編集委員・山本悟氏

#### 3. 共同取材・現地研究会

共同取材: 10月25日(火)~26日(水)  
木曽ヒノキ・御嶽山噴火災害復旧事業視察取材  
木曽森林管理署表敬訪問

#### 4. 会報(林政ジャーナル)の発行等

2016年12月25日付第57号を発行した。

#### 5. 幹事会

以下の通り10回行った。  
1月19日(火)、2月16日(火)、3月2日(火)、4月19日(火)、4月26日(火)、5月17日(火)、  
6月21日(火)、7月19日(火)、10月18日(火)、12月20日(火)(ほかにインターネットのメーリングリストを活用した幹事会を数回実施した)

#### 6. 会員の動向

2016年末における入会者2人、退会者1人。  
賛助団体会員=入退会者なし。  
2016年末現在の会員数:個人会員=29人、団体会員=19団体

#### 第2号議案 2017年度活動計画(案)及び収支予算

過去10年間の研究テーマを列挙すると、2016年度の「地方創生と木質社会」から以下次のようになる。「森林・林業と地方創生」、「森林・林業イノベーション制度と市場の検証」、「木材利用拡大を目指す川上から川下までの総点検」、「東日本大震災からの復興と林業の再生」、「国際森林年を考える」、「日本の森林・林業の再生に向けた政策課題はいかにあるべきか」、「山村の自立に向けて—現状と課題—」、「地球温暖化防止と森林」、「バイオマスをはじめとする木材の有効利用」、「森林・林業・山村の担い手」。

その時代にふさわしい最新のテーマを設定してきたと自負する。東日本大震災に関連した木質バイオマスエネルギーを

はじめ、地球温暖化防止対策としての森林のCO<sub>2</sub>削減問題、未来の新建材として注目を浴びるCLT(直交集成板)による地方創生など、研究成果はともかく、今後も日本の森林・林業の発展のために何をなすべきかを追求していきたい。

2017年度は「森がつくる豊かな人間社会」をテーマに掲げた。手始めに宮城県気仙沼市のカキ養殖業者が赤潮被害に遭い、カキの全滅危機という中で、川の水の汚染問題にその原因を突き止め、植林事業に乗り出し、「森は海の恋人」を上梓した、畠山 重篤氏を第39回定期総会の基調講演者としてお招きし、森がつくる豊かな人間社会の在り方を考えることにした。

2017年度は下記を重点事項として活動する。

#### 1. 定例研究会

「森がつくる豊かな人間社会」(仮題)を年間テーマとする。

#### 2. 共同取材・現地研究会

年間テーマに基づき、春と秋の2回、開催する。

3. 会報の発行「林政ジャーナル」を2回発行する。

#### 4. 幹事会

月1回程度開催(毎月第3火曜日の14時から)する。

#### 5. 組織の拡大

新会員の加入促進、会員相互の連携とその円滑化に努める。

### 第3号議案 役員改選

役員は次の通り

<幹事> 上松寛茂、滑志田隆、古川與一、杉本哲也、赤堀楠雄、海老沢秀夫、米倉久邦、城戸檀、水口哲、土屋繁(新任)、山本悟(新任)

<監事> 篠原宏

### 第4号議案 その他

### 2016年度(1~12月)の収支決算

項目	前期繰越額		予算額	決算額	備考
収入の部	1 会費 個人会員	会費	224,000	140,000	7,000×20人
		経年度未納分	56,000	28,000	7,000×4人
		個人会費計	280,000	168,000	7,000×25人(延べ)
		会費 団体会員	400,000	380,000	20,000×19団体
	2 雑収入	会費	40,000	120,000	20,000×2+80,000(1)4年分
		経年度未納分	440,000	500,000	
		会費収入計	720,000	675,000	
	当期収入合計	100,000	267,123		総会懇、農J祝、利息国土緑
		820,000	935,123		
		合計	3,607,906	3,723,029	

支出の部	1 研究会費	講師謝礼	150,000	110,000	5万×1+3万×1+1万×3人
		会場費	0	0	
		小計	150,000	110,000	
	2 共同取材費		50,000	30,000	
			180,000	59,400	
	3 会報発行費	総会費	220,000	406,718	日本記者クラブ振込
		幹事会費	0	0	
		小計	220,000	406,718	
	5 事務局費	通信費	120,000	99,290	
		印刷費	10,000	0	
		事務用品費	10,000	9,112	
		小計	140,000	108,402	
	6 雑費		40,000	28,874	
			40,000	0	
	当期支出合計		820,000	743,394	
	当期収支差額		0	191,729	
	次期繰越額		2,787,906	2,979,635	

## 2017年度収支予算書

項目			前年度決算額	予算額	備考
収入の部	前期繰越額		2,787,906	2,979,635	
	1 会費 個人会員	会費	140,000	203,000	7,000×29人
		前年度未納分	28,000	70,000	7,000×10人(延べ)
		個人会費計	168,000	273,000	
	会費 賛助会員	会費	380,000	380,000	20,000×19団体
		前年度未納分	120,000	0	
		法人会費計	500,000	380,000	
	会費収入合計		668,000	653,000	
	2 雑収入		267,123	100,000	総会・懇親会費、利息
	当期収入合計		935,123	753,000	
	合計		3,723,029	3,732,635	
支出の部	1 研究会費	講師謝礼	110,000	130,000	
		会場費	0	0	
		小計	110,000	130,000	
	2 共同取材費		30,000	40,000	
	3 会報発行費		59,400	180,000	発行2回
	4 会議費	総会費	406,718	200,000	
		幹事会費	0	0	
		小計	406,718	200,000	
	5 事務局費	通信費	99,290	128,000	会報発送費含む
		印刷費	0	10,000	
		事務用品費	9,112	10,000	
		小計	108,402	148,000	
	6 雑費		28,874	30,000	
	7 予備費		0	25,000	
	当期支出合計		743,394	753,000	
	当期収支差額		191,729	0	
	次期繰越額		2,979,635	2,979,635	

## 監査報告書

「日本林政ジャーナリストの会」の2016年度の事業報告、収支決算書を監査した結果、適正に処理されたものと認めます。

2017年 3月 7日

日本林政ジャーナリストの会

監事 植原 宏

## 発行

日本林政ジャーナリストの会

〒107-0052 東京都港区赤坂1-9-13

三会堂ビル 日本林業協会内

TEL. 090-5541-6891

FAX 048-771-3554